



NPO法人 きょうと介護保険にかかわる会

発行人 梶 宏 事務所 〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町 3-20 賀陽コーポラス 809
TEL・FAX:075-821-0688 E-mail:npokakawarukai@helen.ocn.ne.jp
https://npokaigo.or.jp/

地域包括支援センターに期待する

理事長 梶 宏



日本で初めて乳児医療と65歳以上の高齢者医療を無料にしたのは、岩手県の僻地、沢内村(今は合併して西和賀町)だった。1960年に老人、61年に乳児(1歳未満)を無料化。これによって乳児死亡率をゼロにした。

ときの村長、深沢晟雄は東北大学法文学部で学び敗戦は満州の開拓地で迎え、帰国後は大企業のサラリーマンを経て、50歳になる前に故郷に帰り、1954年村長になった。当時は僻地に来る医師は県立医大から嫌々派遣されてくる構造になっていたが、新村長はやる気のある小児科医を呼び、さらに予防医学に関心をもつ医師も招いた。「自分たちで自分たちの生命を守る」ことを住民と行政の共通課題として掲げ、住民への保健教育を徹底した。保健と医療の一体化を図った包括医療の体系化は「地域包括医療」のモデルとなった。

15年後、国は70歳以上の高齢者医療の無償化に踏み切った。しかし、残念ながら国民の意識変革と連動しなかったため、行き場のない認知症の高齢者の社会的入院が医療保険の破綻に繋がってくる。この事態を修正するため介護保険が生まれたと私は思った。「認知症の人と家族の会」のような市民の自律した活動もあった。だが、国民の真の権利意識が強固になったというより受益者意識の残存が根強かった。

高齢者の医療保険で、高所得者に3割の自己負担というのは仕方ないとしても、年収

200万円以上だと2割負担というのは如何なものか。やがて介護保険にも連動すると疑いたくなる。そうさせないためにも、地域包括ケアシステムが本当に機能すればと願っている。それには私たちの真の権利意識と自律の心が必要だと思う。沢内村のような狭い地域と比べ、大都市の場合地域包括ケアには困難性がある。が、都市には専門家が豊かに存在する。専門家に対してはお任せではなく、その知識を栄養にして市民が自律することに期待したい。

大阪市平野区に、高層住宅9棟に1,200所帯1,800人が居住する公営住宅の団地がある。高齢化率は50%を超えている。ここに2019年10月から「瓜破(うりわり)北助け合い活動の会」がつくられ、有償ボランティア活動が始まっている。会員には活動会員と依頼会員があり、両方を兼ねている会員もいる。入会費が1,000円で、活動に対する謝礼は30分500円でそれ以上は30分単位で300円。登録者は103名で増える傾向にあるという。この組織化は、地域の社協と地域包括支援センターのコーディネーターだったが、できてからは市民が自律的に運営している。

大都市でもやればできる例がこうして存在する。それぞれの地域の個性を生かして、それぞれの助け合いが行われるよう、地域包括支援センターの役割に期待したい。

目次

地域包括支援センターに期待する・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
 地域包括支援センター実態調査活動報告 No3・・・・・・・・・・ 2
 介護保険ホット News・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
 1月研修会 チャリンコ日本縦断・新春会員交流会報告・4~5
 2月研修会・3月研修会案内／本の紹介・・・・・・・・・・・・・・ 6
 私の介護体験／本の紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
 会員リレーえっせい／編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8



会のホームページは上記QRコードから

地域包括支援センター実態調査活動報告 No.3



京都市の高齢者問題調査を振り返る

～地域包括支援センターの実態調査は私たちの手で～

皆様と共に取り組んだ地域包括支援センターの調査票（35項目）が完成し、1月20日に京都市内61箇所の全事業所に発送しました。各事業所のご理解とご協力を得て多くの回答が戻ってくることを願っています。

この調査の回答の締め切りは2月15日。聞き取り調査の訪問は3月早々から始める予定をしています。コロナ禍もその頃には収まっていることを祈るばかりです。

今回の調査は当会としては約10年ぶりになります。10年前の事業所の課題がどのように改善されているか、あるいはさらに課題が増えているのか、調査の結果が気になるところです。

1973年からの老人実態基礎調査

今回の調査をきっかけに、京都市が高齢者問題について市民や事業所にどのような調査をしたのか振り返ってみました。私の手元にある一番古いのは船橋市長の時代、同志社大小倉教授が1973（昭和48）年2月に実施された老人実態基礎調査報告書で、老人福祉法制定後11年目と記されています。前がきに「老後問題の基本的課題『貧困、孤立、不健康』に加え、高齢人口の増加、私的扶養の減退傾向が強まる中、老後問題は多様化し、かつ深刻化している。京都の老いの全貌を極めつくしたとは言えないが、老いの現実とその認識に立って何をなすべきかの指標を明らかにする努力を試みた。この調査が今後の京都市の老人福祉施策に活用されんことを切望する」とあり、高齢者人口が7%を超え高齢化問題が表面化してきた時代の調査者の熱意を感じます。その後、1981（昭和56）年、1985（同60）年に調査を実施。

1990年からの高齢社会対策実態調査

1990（平成2）年に京都市高齢社会対策実態調査が、立命館大の真田教授を中心に行われました。

調査の柱は

- ①就労と所得保障
- ②生涯的な保健医療体制の確立
- ③住宅・住環境の整備
- ④生涯学習と社会参加
- ⑤高齢者福祉の充実
- ⑥地域での福祉の推進と情報提供
- ⑦計画の推進

とし、調査結果に基づき1992（平成4）年に「高齢社会対策推進計画」が策定され、保健福祉分野での具体化として1994（平成6）年に「第一次高齢者保健福祉計画」がつけられました。調査は計画とセットで介護問題も含めた総合生活保障という考えで成り立っていました。

2000年以降はすこやかプラン策定のための調査

介護保険法が制定された2000（平成12）年以降は高齢者施策を総合的に推進するために、老人福祉法に基づく「高齢者保健福祉計画」と介護保険法に基づく「介護保険事業計画」が一体的に策定され、京都市においては「京都市民長寿すこやかプラン」の名称で策定されました。今回も第8期プラン策定のために高齢者、要介護高齢者・介護者、サービス事業者を対象に調査が実施されましたが、「すこやかプラン」の内容は、介護保険関係が大半を占めており、一般高齢者福祉に関する部分は極めて少ないものとなっています。

民間法人に委託運営されている地域包括支援センターについては、本来、京都市が設置主体となる公的機関であるためか、上記の京都市調査の対象にはなっていないことや地域包括支援センターに関する実態調査がないことが分かりました。

（中川慶子記）

～ 介護保険ホット News ～

介護者（ケアラー）支援は、今どうなってる？

当会も参加している「よりよい介護をつくる市民ネットワーク」は昨年10月に第6回シンポジウムを開催したが、そのテーマは「今こそ介護者（ケアラー）支援を考える」だった。その中で「介護保険制度の理念である『介護の社会化』に逆行するように介護の『再家族化』が進められている。公的介護保障の視点からの、家族介護者（ケアラー）支援制度を構築する必要がある」と提起された。ケアラー支援の現状について概観する。

自治体の動き

一般財団法人地方自治研究機構によると、2021年12月24日時点でケアラー支援に関する条例が施行及び施行が予定されているのは次の6自治体である。

施行日	自治体	提案者
2020年3月31日	埼玉県	議員提案
2021年6月30日	三重県名張市	首長提案
2021年9月9日	岡山県総社市	首長提案
2021年12月14日	茨城県	議員提案
2021年12月24日	岡山県備前市	首長提案
2022年4月1日	北海道栗山町	首長提案

これらの条例は、ケアラーが個人として尊重され、健康で文化的な生活を営むことができるよう社会全体で支えることを目的として、基本理念、自治体の責務や住民・事業者・関係機関の役割を明らかにするとうたっている。具体的施策について、たとえば埼玉県は「埼玉県ケアラー支援計画（2021～2023年度）」を作成し公表しているので参照されたい。



埼玉県ケアラー支援計画

ヤングケアラーへの対策が動き出す

家族介護者の中でも18歳未満、いわゆるヤングケアラーの問題が注目されている。家族のケアに時間を割かれるため学業や部活

に専念しにくい環境下にあり、将来に及ぶ影響が懸念される。厚生労働省と文部科学省は2021年3月に「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム」を立ち上げ、その報告を受けて2022（令和4）年度概算要求にヤングケアラー関連予算が盛り込まれることになった。プロジェクトチームの第5回（2021.9.14）議事録によると、その予算は自治体がヤングケアラーの実態調査や支援体制、相談体制を整備したり、若い兄弟の世話をするヤングケアラーのための訪問家事支援事業等に使われるという。

神戸市では2021年6月に専任担当者をおいて「こども・若者ケアラー相談・支援窓口」を開設し、11月末までに117件の相談を受けた（2021年12月8日神戸新聞より）。鳥取県でも昨年4月にヤングケアラー支援の相談窓口を3ヶ所設け、LINEによる相談も試行中という。

京都市での状況は？

京都市は2021年4月1日付で「孤独・孤立対策プロジェクトチーム」を設置。同チームではヤングケアラーの問題を集中的に検討するための部会を6月に設置・開催し、7月中旬以降実態調査を順次進めるとした。7・8月に市立中学・高校の全生徒を対象にヤングケアラー実態調査を実施。本人への調査だけでなく、当該世帯の生活状況を把握している支援者（団体）にも調査を行い、その結果をまとめて2022年1月12日の京都市会教育福祉委員会で配布し公表した。今後の支援に活かしていくという。



京都市ヤングケアラー実態調査結果

京都市では京都市ユースサービス協会が子ども・若者ケアラーをテーマにした事例検討会や当事者のつどいも開催している。その活動にも注目していきたい。

元気なシニア紹介第1回

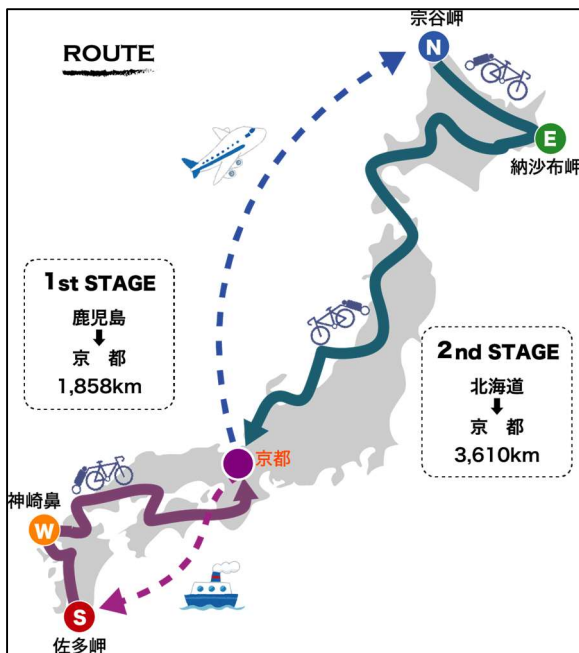
チャリンコ日本縦断 ～アクティブシニアの小さな冒険～

第115回
研修会
報告

日時：1月14日（金）13:30～16:30
 会場：ひと・まち交流館 京都 3階第5会議室
 講師：正木隆之さん（会員）
 参加者：23名



日本は広い！日本人はやさしかった！ 5,400 kmの旅！



そして、最愛の奥様の見送りで、いよいよ大阪南港からさんふらわあで一路、鹿児島志布志港へ。

ファーストステージ

九州（鹿児島、熊本、島原、長崎、玄界灘）
 ～下関～山陽路～しまなみ海道～吉野川
 ～和歌山～奈良～京都

期間39日走行日数29日、距離1,858km
 獲得標高12,625m、温泉入浴日20日

セカンドステージ

自宅で一時的休息の後再び、最北端の稚内へ飛行機で～サロマ湖～網走～根室納沙布岬～札幌～東北（青森ねぶた～三内円山遺跡～八郎湯）～北陸（新潟～佐渡～金沢）～琵琶湖西岸～京都

期間72日走行日数48日、距離3,610km
 獲得標高16,689m、温泉入浴日34日

動機

2016年61歳での退職を機に、38年間働いた自分へのご褒美に自分の脚で自由に動けるチャリンコで日本縦断輪行の旅を計画した。期間は同年5月8日～9月5日。

準備

自転車はヤマハ電動アシスト付きロードバイクにカートをくっつけた。ここに着替えやテントなどの荷物を入れ、工具、雨具、カメラなどはフロントバッグを用意。輪行が一目でわかるように「日本縦断」のラベルをつけた。そのほか、マット、シュラフ（寝袋）、革製ヘルメット等々細心の注意を払って準備。少しだけ輪行の予行演習を行った。

マイルール3原則

- 1日の走行は50km
- 夜、雨の日は走らない
- その土地の美味しいものを食べる

行く先々での交流

講師は余震の続く熊本では災害ボランティアに参加して心優しい若者たちと交流、宮島では鹿との交流（一時置いておいた自転車のバックから鹿がお菓子をポリポリ）、発信するFacebookのフォロワーから一夜お泊りのご招待、手斧で原生林を開拓した人々を祀る拓魂百年碑の前では先人を偲んで心の交流、笛の音に誘われて盆踊りに飛び入りし



て東北の人たちと交流される等、行く先々での講師の行動にはお人柄がにじみ出て、御尤もと頷くばかりでした。

広い日本の最南端、最西端、最北端、最東端を一跨ぎで走破された脚力と実行力にまずは感服しました。行く先々でその土地、ひと、自然に思いを馳せ足の向くまま、心のママに楽しんでおられる姿。そして毎日の緻密な記録と写真の数々で冊子を記念に刊行され、さらに私たちに語りで楽しませて下さった。すごい！の一言です。

結びにアクティブとは 1.好奇心 2.持続性 3.楽観性 4.柔軟性 5.冒険心と締めくくられました。

研修会は小中さんの軽妙な司会もあり、終始なごやかな雰囲気でした。



新春会員交流会



今年は60年に1回の壬(みずのえ)の寅年。「新しく立ち上がる」「生まれたものが成長する」という縁起のよい年

でもあるようです。今回の新春交流会は会員23名が参加し、中川さんの司会で始まりました。

会場は、先に開催された正木さんの『アクティブシニアの小さな冒険』の講演の時の教室形式から「口」の字型に配置換えし、全員が顔を合わせて団らんでできる形にしました。

机の上には、赤色の包装紙に達磨が描かれ



会場の感想

お気持ちの柔らかさ、心の柔らかさが生み出した贅沢な旅。ストーリーが物語になっていて感動した。ロマンですね。／いくつになっても新しいことにチャレンジする精神が大切。／ユメを退職後に実現させる快挙。体の動くうちにセネバならぬと考えさせられました。／5400kmの旅を自力でやり遂げたことに敬服。／単なるチャリンコ旅ではなくいろいろと考える、楽しいレポートでした。／旅は出会いですね。／日本縦断は無理ですがその100分の1でも試してみたいです。今年の年賀状に玄界灘の浜ノ浦の写真を使いました。／アクティブ=やりたいことならできる?ということ? (中川慶子 記)

た可愛らしいお菓子が配られ新春に彩を添えています。

そして「今年の抱負」を色紙に書いて、一人1分30秒の持ち時間でそれぞれの思いを述べることに。

和やかな雰囲気の中、色紙に書いた言葉に対するエピソードを交えながら発表が始まりました。「今を生きる」「出会いを楽しむ」「ゆっくり生きる」「会いたい」「健康でいたい」「・・・に挑戦する」「できることを続ける」等、23枚の色紙の言葉に、それぞれの人生に向き合う思いがありました。

今また、新たな型のコロナウィルスが、全国に急速に蔓延していますが、新春交流会での会員皆様の思いがコロナの憂鬱を払拭できることを願うばかりです。

そして最後に、毎日をしっかり「生きる」という理事長の言葉に改めて全員が賛同し、新春交流会を楽しく、有意義に終えることができました。

みなさん、今年も「きょうと介護保険にかかわる会」をよろしく願い申し上げます。

(栗山博臣 記)

第116回 研修会 案内

日本の医療と介護の特徴 ～地域包括支援の充実のために～



日 時：2月19日（土）13：30～16：30
 会 場：ひと・まち交流館 京都 2階第1会議室
 講 師：奈倉道隆さん（介護福祉士、老年科医師、当会会員）
 参加費：会員 300円 一般 500円

日本の医療制度の成り立ち、コロナ禍で露呈した日本の医療体制の脆弱さ、医療機関相互の連携の課題、日本の看護の課題、そして地域の包括的支援体制に医療はどのようにかかわるか等々。長年にわたり医師として研究者として日本の医療と介護の両面にかかわってこられた奈倉先生のお話です。
 久しぶりのご登場です。

第117回 研修会 案内

ホームホスピスってご存知ですか？ ～看取りまでの「とも暮らし」をつむぐ家～

日 時：3月12日（土）13：30～16：30
 会 場：ひと・まち交流館 京都 3階第3会議室
 講 師：西野マリさん（NPO法人宝塚つ・む・ぐ・の家 理事長）
 参加費：会員 300円 一般 500円

3年前に木造2階建ての民家を借りて開設されて以来13人の高齢者を看取ってこられました。全国でも約60箇所に「家」が誕生しています。
 宝塚市のヘルパーを定年退職後、同じ思いの3人で立ち上げ現在も6名の要介護の高齢者が住んでいます。グループホームでもない新しい形の家です。京都周辺にはありません。創業者から設立の経過、日々の喜び、運営の厳しさ等々、お話をお聞きます。

【本の紹介】 『老年の心と健康』 奈倉道隆著 ミネルヴァ書房



この著書は、
 I 老年の心と健康
 II 老年科医のメモ
 III 高齢化社会と中高年の健康管理
 という三部構成になっている。Iでは老化とは何かから始まり高齢者の身体と精神の特徴、そして

老年を豊かにするための工夫が具体的にわかりやすく書かれている。IIは朝日新聞に連載した「老年科医のメモ」をほぼそのまま収録したもの。IIIは中高年に向けて、心がけたい健康生活へのアドバイスがまとめられて、

日々の心がけが大切だと改めて納得した。

高齢の患者には地域社会を医療の場とする地域医療が効果的であること、居宅療養を支えるには訪問看護がカギとなること、デイケアとショートステイの重要性など、地域包括ケアシステムにつながる内容も興味深い。

驚くのはこれが1978年に発行された著書であることだ。その先見性のある内容は、今読んでも全く古さを感じさせない。この本を書かれた時は40歳代だった著者が米寿を迎える今、医療と福祉をどのようにご覧になっているのだろう。それを伺うことができる2月研修会が楽しみだ。

（冬木美智子 記）

新シリーズ「私の介護体験」

介護を受ける、介護をする、そのナマの声を繋ぎます

第4回

僕のこと分かるだろうか？

会員 萩原三義



私の母は昭和3（1928）年、東京の下町に生まれ、現在は「野崎参り」で有名な野崎観音（大阪府大東市）の近くの特別養護老人ホーム（特養）で生活している。夫の亡き後、介護保険をほぼフル活用してデイサービスとホームヘルプサービスを利用し、会社勤めをしている次男と二人で生活していたが、2020年5月に腰の激しい痛みを訴え入院となった。その後転院し地域包括ケア病床にも転床したが、自宅での生活に戻ることは困難であろうという見立てにより介護老人保健施設に入所し、同時に特養の入所申請をした。2020年末に特養入所が決まり、今年は二度目の年始を迎えた。

with コロナ期と重なったこの20ヶ月余り、キーパーソンの私は転院・介護認定調査・入所時などに会っているが、兵庫県に住んでいる長女は入院するまでは月2回通っていたものの、その後特養入所時に会っただけ。主介護者である次男は、入院以来一度も会えていない。

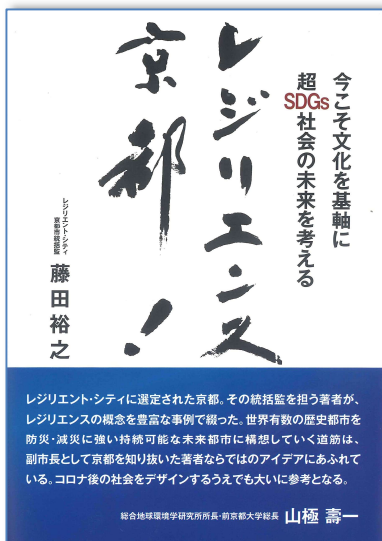
特養からは毎月「新聞」で行事の様子等を伝えて頂いており、新年号では「施設での面会再開について」予約制での受付を開始するとあった。

次男の目下の心配事は、「今度会った時に、僕のこと分かるだろうか？」だ。

【本の紹介】

『レジリエンス京都！今こそ文化を基軸に超SDGs社会の未来を考える』

藤田裕之著 京都新聞出版センター



昨秋、野島断層保存館へ行った帰りに、阪神・淡路大震災の際にボランティアで入った神戸の小さな公園を訪ねてみました。ここで毎晩たき火をしたなーなどと思い出しましたが、周囲の街並みはすっかり変わって昔の面影はなく、歳月の力を感じるようになりました。

街が強くしなやかに再生する、この力のことを「レジリエンス」というそうです。この本の著者の藤田さんは、ただ元に戻るのではなく、ダメージを受ける前以上に回復することだと定義されていますが、確かに神戸の街は震災を経て防災意識も高まり、道も広く建造物も強くなっています。

京都が戦乱、飢饉、疫病、遷都など数多の危機を乗り越えて千年以上も栄えてきた背景にも、社会の持つレジリエンスがあったと著者は言います。では、次の千年はどうでしょう。感染症や南海トラフ地震も心配ですが、地球温暖化、原発、少子高齢化、サイバーテロなど、社会の持続可能性を揺さぶる新たな脅威は次々と生まれています。

それらの広範な課題に対して、いかにレジリエンスのある社会を作っていくのか、本書の主張に耳を傾けてほしいと思いました。

（正木隆之 記）

会員リレーえっせい 56

片桐直哉

(一般社団法人 くじら雲 理事長)



「福祉」じゃなくて「場づくり」!

現在、京都市会議員の公務とともに、北区の新大宮商店街を中心に障害のある子どもの居場所づくりやコミュニティカフェの運営に取り組んでいます。

昨年の夏から、コミュニティカフェでは、銀行に長年預けっぱなしになっている預金を公共的な活動に使う休眠預金活用の助成を受けて、不登校だったり、短い時間しか学校に行けない子どもたちの居場所を始めました。

ここ数年、全国的にも、子ども食堂や子どもの居場所づくりの活動はたくさんできています。私も、いろいろな場の運営のお話を、たくさん聞かせていただいています。やはりその活動に携わっている方の大半が、ボランティア

で従事され、助成金なども受けながら食材やその他経費を何とか回しておられるというところが多いようです。

専門的な知識を必要とする支援もボランティアでされていることは、率直にすごいなと感じるところですが、私自身は、制度にそ

った福祉サービスだけでなく、子どもの居場所的な、福祉の対象にならない子どもたちを支援する取り組みについても、ちゃんと職員がプロとして、有給で携われる事業にしたいという思いを強く持ってやってきました。

行政の支援が不足しているから、子ども食堂が増えるという指摘もありますが、こうした市民による子ども支援は、行政のサービスが充実したら必要ないかというところでもなく、支援のニーズ、多様性にこたえていくためにも、やはり持続可能な形で、増えていくことは大事です。

このことは、子どもの分野だけでなく高齢者の支援でも言えますが、こうした支えあいの活動を、行政の補助金や、大きな企業の寄付金に依

存するのではなく、小さな収益事業や、個人の少しずつの寄付を集めて、仕事として続けていけることが必要なことだと思います。社会全体に広がっていくよう、共感の輪を広げていきたいと考えています。

存するのではなく、小さな収益事業や、個人の少しずつの寄付を集めて、仕事として続けていけることが必要なことだと思います。社会全体に広がっていくよう、共感の輪を広げていきたいと考えています。



会員募集!



詳しくは上記のQRコードからどうぞ

編集後記

かかわる会は、新春交流会でアクティブシアのアクティブな話を聞き、活動を開始。地域包括支援センター実態調査2回目も始まりました。1回目は2012年9月に実施。2013年5月の総会で決議し、市民の声として京都市長への提言をしました。

4カ所を訪問しました。2006年に開設された地域包括支援センターは、地域の住民にも知られていませんでした。初体験の訪問は、とても緊張しましたが、知りたいという気持ちも強くなったように思います。行ってみるとどの事業所も丁寧に真摯に対応してくださったことが印象に残っています。専門家が集団として高齢者のことを一生懸命考えていることが分かりました。

あれから10年たちましたが、その後地域包括支援センターに一度も行っていません。この調査でも前回と同じ事業所に訪問できればいいなと思っています。

(S・T)